

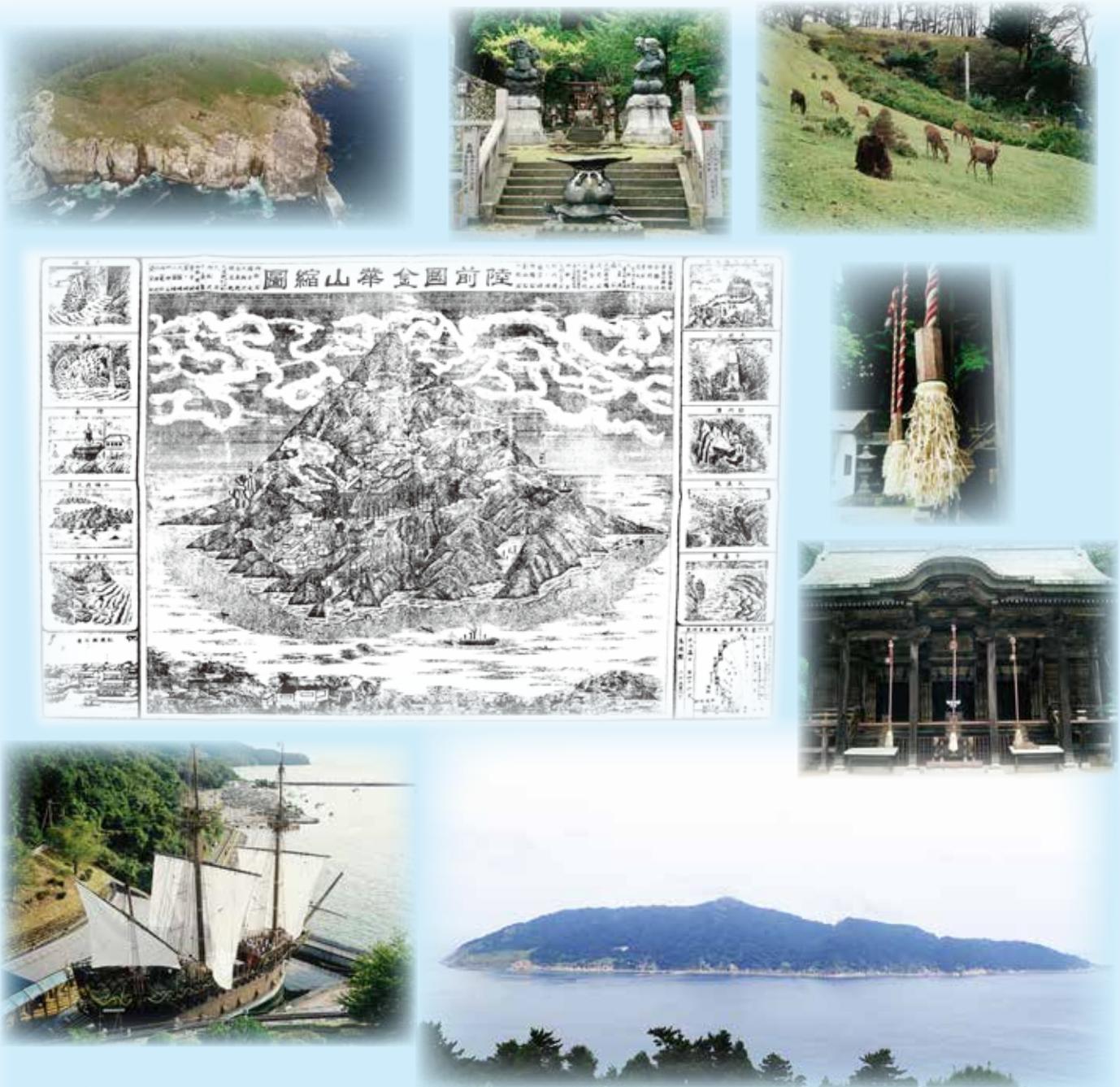
発行：令和 2年 4月 1日
 (株)三協技術 企画管理部
 仙台市青葉区国分町 3-8-14
 TEL：022-224-5503

- ・歴史遺産を復興と振興に
- ・金華山街道歴史探訪記
- ・金華山の歴史
- ・金華山講について
- ・「防災」と文化財

【コラム】講とは？



～大地の声を讀む～



歴史遺産を復興と振興に

株式会社 三協技術 文化財調査室長

結城 慎一

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日の東日本大震災から丸 9 年が経ちました。私たち三協技術では、石巻地区そして三陸地域を歴史的方面からいかに応援し、観光・産業復興に寄与していくかを検討・実施する研究会を平成 31 年 3 月に立ち上げていました。仮称・金華山プロジェクト、構成メンバーは宮城 (仙台・石巻)、東京の 7 人です。金華山、金鉱山、渡来人などのキーワードを出しあいながら、平泉、涌谷、金華山で囲まれる地域の歴史遺産を観光やその他の産業振興にいかにアプローチできるかの話し合いを進めていました。そんな折、令和元年 5 月 19 日のテレビ及び 20 日の新聞報道で涌谷・気仙沼・南三陸 (以上宮城県)・陸前高田・平泉 (以上岩手県) の 5 市町申請の「みちのく GOLD 浪漫」が文化庁の「日本遺産」に認定されたことを知りました。そのタイムリーさに驚くと同時に、若干の方向転換を余儀なくされました。その時から私たちの活動には日本遺産になった市町との連携も視野に入り、現在はまず涌谷町と連携を図ろうと動き出しているところです。涌谷—石巻—金華山を結ぶラインをどのようにして歴史・観光・産業の活性化に繋げていくかが問われています。当プロジェクトにとっても涌谷町にとっても、ウィンウィンの関係性が高められることと考えています。

令和元年 10 月 4 日、まだ完全復興とは言えませんが、石巻市鮎川に「ホエールタウンおしか」が一部開業しました。三つの施設のうち観光物産交流施設と牡鹿半島ビジターセンターです。令和 2 年秋の「全国豊かな海づくり大会」は石巻市での開催が予定され、天皇・皇后両陛下のご臨席予定もあります。

私たちのプロジェクトも仮称が取れて「みちのく黄金文化研究会」とし活動しています。これからも一つ一つ、復興と振興に寄与する活動を推進したいと思っています。

金華山街道歴史探訪記

昭和 14 年 4 月 15 日から 5 月 17 日にかけて河北新報朝刊に 35 回の連載で「仙臺領内“一づくし”」という記事が掲載された。原資料は『寛永 4 亥年撰仙臺之名見立』で、170 年ほど前の幕末庶民の評判記のようなものである。その 240 余項目の一つに見えるのが「霊山は金華山」。「島」であるのに「山」。仏教の隆盛につれて、奥州藤原氏が堂塔四十八坊を建立し金華山大金寺と称し、弁財天を本尊として安置した。現在、島には黄金山神社並びに弁財天が鎮座している。藩主にも民間にも、金華山講として信仰された。

金華山までの海路のあったことも知られているが、金華山講の参拝陸路が金華山街道あるいは金華山道といわれた。各地から石巻に入り、牡鹿半島を抜け金華山へ渡るまでの道筋である。なお「金華山」を「金花山」と記す文献もあり、両方使用されたようだが、ここでは現在使用されている「金華山」とした。

令和元年 7 月 11 日、石巻地内のルートの現状確認で半島東端まで、5 人で車に乗って辿ってみた。先導は小積在住で石巻市議会議員も務める阿部和芳さん。集合場所はサン・ファン・パウティスタ号の復元船が係留展示されている渡波港の一角、宮城県慶長使節船ミュージアム隣のサンファンホテル駐車場。

鮎川浜までは石巻湾側を回る表浜街道と女川湾側を回る裏浜街道があったが、現在は石巻鮎川線 (主要地方道 2 号) となっている表浜街道を辿ることにした。

一行はまず石巻の街道入口に建つ街道碑を確認することからスタートすることにし、北上川に架かる日和大橋を車で戻った。国道 45 号線から石巻街道と呼ばれている国道 398 号線に向かったところに大街道の十字路があり、ここの七十七銀行穀いなないし町支店の前に明治 6 (1873) 年建立の「金華山道」の稲井石製



宮城県内の近世街道



大街道角に立つ街道碑

の石碑がある（註1）。碑文には「大街道十二丁墨廻江渡り込湊又壱里十八丁渡波込入江渡又十八丁祝田又壱里蛤濱込又壱里桃浦込又壱里萩浜込又壱里小積込又壱里小網倉又十八丁大原込十二丁小湊込又一里鮎川込二十八丁山鳥込又海上丈四丁渡りテ大金寺込四十八丁」とある。

そこから日和山北側になる坂を上り鱈山墓地脇を抜け、そして下ると永巖寺前に至る。ここには天保年間（1830～1844年）の稲井石製の追分石があったが、道路拡幅のため現在はすぐ隣の石巻小学校北西角に移設されている。表面には弁財天を表す梵字「ソ」と「金華山」が、裏面上段には「皇及御代昌牟と東奈陸奥山に黄金華咲く」（大友家持の反歌「天皇の御代栄えんと東なる陸奥山に黄金華咲く」と、下段には「右ハ富山六里十八丁 松し満 羽黒山 五丁 袖の渡（不明）左ハ牧山一里六丁 日和山 五丁 物見の松 壱里」と彫られている。

昼食後、私達は再度渡波の万石浦を北に見ながら祝田を通り、一路半島東端を目指した。万石浦は冒頭の“一づくし”にも「蛸は渡ノ波」と記されており、藩政時代末期には既にカキの名産地であった。

まず立ち寄ったのは月浦である。浜を見下ろす高台には支倉常長像があり、そこから海岸線が一望できる。ここは伊達政宗の命を受けた常長を乗せたサン・ファン・パウティスタ号が、慶長18（1613）年9月15日、メキシコを目指し出帆した地である。伊達『治家記録』には「此日南蛮国へ渡サル黒船牡鹿郡月浦ヨリ発ス。」とある。

次に立ち寄ったのが萩浜。ここは牡蛎養殖の父、「牡蛎王」の異名をとる宮城新昌氏（註2）がカキ養殖に最も適した場所とした地である。この地で研究を重ね、萩浜と万石浦でカキ養殖を始め、深海での養殖が可能となる「垂下式養殖法」を全国に広めた。現在では世界で食されるカキの実に8割以上がルーツを辿ると石巻だと言われるくらいである。2011年の東日本大震災で壊れた彼の功績を讃える石碑も現在では再建されている。

明治41（1908）年には石川啄木もこの浜に来て、「港町とろろとなきて輪を描く 鳶を壓せる潮曇りかな」と歌を詠んだ。

車は隣の小積に行く。浜沿いには民家は見えなく、防波堤工事の音が響く。ここからは2号線を外れる小積峠を確認した。ここは“みちのく潮風トレイル”（註3）のコースと重なるが、小さな掲示があるだけで、まだ潮風トレイルの積極的案内には至っていないようだ。踏査時の草木の状況から推察するのだが、夏から秋には草木で鬱蒼として、歩くのに往生するのではと思った。この峠は次の浜までのショートカットコースといえ



石巻市内～牡鹿半島・金華山街道の図

る。2人が峠越えをし、3人は車で2号線に戻り、小網倉の浜で待った。

この海岸も震災復興工事の真っただ中で、重機や大きいクレーンが目立った。小積峠のこちら側の出口が3人には分からない。車を降りて周辺を歩くと、いたるところに鹿の足跡が発見できる。やがて電話が入り、谷筋を1本戻ったところに2人は出てきた。震災で倒れた木立がそのままの状況で残り、出口を隠している。

ここからは鮎川を目指す。足跡だけではなく、道々鹿を見かけること数度。鹿との遭遇で、交通事故の問題もかかっているようだ。鮎川の町も復興の重機、クレーン、ダンプカーが多い。道路も工事で迂回しながらである。震災から8年半を過ぎ、もうすぐで復興が成るのか、まだまだと思うかは「見る人によって異なるなあ」と思った。捕鯨の町、商業捕鯨が再開されたが、町の復興に全力を注いでいる姿はある。

まず鮎川鉱山跡に立ち寄った。この場所は浅熱水性鉱脈鉱床の鮎川金山として知られていた。江戸時代に開発されたとされているが、昭和41（1966）年に閉山となった。その後は金鉱山資料室も備えた砂金採集体験施設になっていたが、震災以後は閉ざされたままである。近くには鮎ノ浦（金）鉱山、女川（金）鉱山もあった。

昨年5月20日、宮城県気仙沼市・南三陸町・涌谷町、岩手県陸前高田市・平泉町の5市町が連携した「みちのくGOLD浪漫—黄金の国ジバング、産金のはじまりの地をたどる—」（代表：涌谷町）を文化庁が日本遺産として認定した。気仙沼市は大谷鉱山巨大精錬所跡・鹿折金山跡、南三陸町は田東山経塚群、涌谷町は黄金山産金遺跡（国史跡）、陸前高田市は玉山金山遺跡、平泉町の中尊寺金色堂など構成遺産を活用し、それぞれを結ぶ文化財観光ルートを創設していくという課題に取り組んで

註1. 稲井石：冒頭の“一づくし”によると、「碁石は石巻井内」と記されている。井内は稲井のことである。碁石は紀州的那智黒を以て最上品としたが、昔は入手困難につき稲井石を国内品に使用した。この石は石碑・敷石・板橋に利用され、桃生郡の雄勝石は硯に加工された。

註2. 宮城新昌（みやぎしんしょう）：1884 - 1967。沖縄県出身の水産実業家。渡米してカキの養殖を学び、カナダで水産会社をおこした。大正12（1923）年に帰国し、14年（1925）年に垂下式カキ養殖法を考案したことは本文通り。次女の岸朝子さんは、日本料理記者・食生活ジャーナリストとして知られる。

註3. みちのく潮風トレイル：トレイルとは登山道や林道を意味し、東北地方の太平洋岸、青森県八戸市～福島県相馬市まで設定された。環境省のホームページによると、トレイルマップを携帯して歩くことを前提として標識類が整備されているが、まだ標識類が不備などところもあるとのこと。当地は「石巻牡鹿半島北部ルート」に該当し、万石浦から金華山街道を辿り、牡鹿半島の浜を歩く道程である。

金華山の歴史

技術顧問 文化財担当

渡邊 泰伸



金華山は宮城県石巻市鮎川浜金華山に所在する。宮城県の北東部の最も太平洋に突き出した牡鹿半島の東南端に位置する。東西約4km、南北5km、周囲24km、面積959ha、標高445mの楕円錐形の山島である。

島の南東、鮑荒崎には明治9(1876)年に造られた金華山灯台がある。この灯台は本州で最も東に突き出した位置に所在することから、三陸漁場で操業する漁船の定点、北海道へ向かう航路の目印でもある。さらにシアトルやサンフランシスコから太平洋を西進して来る船舶はこの灯台を目指し、太平洋で日本の最初に目にするランドマークであった。島の地質は閃緑岩や花崗岩の火成岩よりなり、黒雲母岩が目につく対岸の半島部が水成岩であることと異なる特異な島である。

金華山は島全体が黄金山神社の神域とされ、地場の信仰の対象とされ、東奥の三大霊場(山形の出羽三山・青森の恐山・宮城の金華山)に数えられている。

明治2(1869)年の神仏分離令により、大金寺の仏号を除き黄金山神社となり、御祭神も金山毘古神・金山毘賣神の二柱とし、頂上奥殿(奥ノ院)大海祇神社の御祭神には大綿津見神・市杵島姫神(仏号・弁財天)外二柱が奉祀された。

現在の神社は明治30(1897)年2月の火災で全焼し、1972(昭和47)年に再建されたものである。

また、金華山は江ノ島・巖島・竹生島・天河と共に日本五大弁財天の霊地ともされ、弁財天を守護神とし祭ることから「福の神、財宝神」と尊崇され、金運の神様が宿る『金華山黄金山神社』として著名で、「金華山へ3年連続でお参りに行くと一生お金に困らない」と言い伝えられ、金運スポットとして江戸時代は年間60万の人が訪れたと伝えられている。

近年でも平成4(1992)年には15万2978人が訪れていたが、平成22(2010)年には5万929人と徐々に減少していった。さらに平成23(2011)年に発生し岩手、宮城、福島に大災害をもたらした東日本大震災以降は極端に減少し、平成29(2017)年には1万5482人まで減少してしまった(牡鹿総合支所作成資料「金華山の概要」2018による)。

金華山の由来については何度かの火災に遭い記録がないため、不明な部分が多い。寺伝によれば奈良時代半ばの創建と伝えられ、「牡鹿連宮麿等」が天平21(749)年の産金の祝事に国守に請願して、秀麗の地である金華山に神社を創建したとある。宮麿なる人物は、天平産金の行賞記事「続日本記天平感寶元年(749)5月11日の条」に「私度沙弥小田郡人丸子連宮麻呂授法名慶實入師位」とあり、小田郡の人である。小田郡は中世

には遠田郡の一部となったため、江戸時代には混乱が見られ、天平産金遺跡は金華山とする説が流布したと考えられる。しかし文化7(1810)年に沖安海が、遠田郡涌谷町(旧涌谷村)黄金迫に所在する黄金山神社跡が天平産金遺跡であることを明らかにしている(沖1810)。

古代末・中世には平泉の陸奥守藤原秀衡、石巻城主葛西三郎清重等より保護を受け、弁財天を守護神として、別当寺を金華山大金寺と称し多くの信仰を集め、修験道場となり修行者により金華山信仰が各地に広められたという。

『封内風土記』(田辺1772)、『奥州金華山畧縁起』(著者年次不明)は信憑性が疑われている。神社所蔵の「大般若経」は平泉の藤原秀衡の寄進とされているが、経箱の蓋裏墨書にある「天正十一年(1583)云々」は後世の書写と考えられ(小野寺正人1977)、平泉との関係はつまびらかではない。また、本吉郡南三陸町志津川所在の荒沢神社の社宝に『紺紙金泥大般若経卷二百九十七』(県文化財)がある。この経巻は藤原基衡の時に中尊寺経蔵から流出し、田東山寂光寺の什物となっていたものが伝わったといわれており(渡邊ほか2007)、これになぞらえた可能性がある。葛西氏と関わる資料も知られていない。

大金寺は葛西晴信が秀吉に所領を没収されたことに始まる天正年間の乱(1573～1585年)の兵火で焼失し、下野国岩倉の僧成蔵坊長俊(栃木県日光山の僧正)が再興して真言宗となったというが、不明な点が多い(宮田1969)。

「大金寺」についての同時代資料の初見は、延宝3(1675)年の弁財天堂の「金華山棟札3号」である。さらに文化10(1813)年の火災により堂塔と古記録を一切焼失している。近世の大金寺は伊達家祈願寺である、仙台市所在の龍寶寺の末寺に連なり、真言宗に属している。

仙台藩は金華山を「一山除地」としたが所領は与えていない。神社所蔵の「太刀備前長船伝兼光」「太刀山城粟田口住藤史郎良光」(昭和58年12月17日指定石巻市有形文化財)が伊達家の奉納とされているが、詳細な記録は不明である(非公開)。金華山信仰は、財宝神である弁財天を祭る金華山を「天平産金地のみちのく山は金華山」と考え、さらに平泉の黄金文化を付会し、黄金伝説の信仰となったものと推察される。

慶長16(1611)年に来日したイスパニア大使ビスカイノの目的が、東方海上にあると考えられていた金銀島の探索であるとする考えは、黄金の国ジパングを連想させるロマンを感じさせる。この事については享保4(1719)年に書かれた西川如見の『長崎夜話』に「世界の目に日本の東海に金銀島ありと此の島なら

ん・・・」とあり、国内でも金を産出した島という考え方もあった(西川 1719)。

中世以降は金華山は修験道場となり、真言系の修験者による回峰行も行われた。近世には所領を持たない別当大金寺は修験者を通して、金華山弁天の福德を説きその信仰が広まった。江戸中期からはいわゆる「代参講」の流行に象徴される現世利益信仰の隆盛と共に、財宝神である大金寺の本尊弁財天に直接結びついた「講」が結ばれ、金華山碑も奥羽各地に造立されるようになる。金華山信仰は修験者を通して広がったと推察される。石巻を訪れた芭蕉と曾良の『奥の細道』(元禄 15(1702)年)に「金花山海上に見わたし・・・」とあるのは金花山の初見とも言われる。

明治 2(1869)年の神仏分離令により、現在の神式祭祀形態の黄金山神社となり、明治 7(1874)年県社となった。神社の建物は明治 30(1894)年の火災で全焼し、その後暫時再建され、昭和 27(1952)年神社庁に属する宗教法人となった。昭和 47(1972)年頃には現状の状態となった。金華山は昭和 45(1970)年に南三陸金華山国立公園となり、平成 27(2015)年には三陸復興国立公園に編入された。これに伴い青森県八戸から福島県相馬市までつなぐ、約 700km の「みちのく潮風トレイル(環境省事業)」のコースの一部として標識・遊歩道などの整備が進められている。観光客や参拝客の受け入れ体制を整備することは、金華山の観光復興及び牡鹿半島復興に欠かせないものである。

金華山は幾度かの戦火、火災等により本来の姿が明らかではない。島内各所に宗教的遺構の可能性のある地点が散見される。今後、踏査や考古学的な手法によりその実態を明らかにすることが可能である。金華山の尊厳を失うことなくその歴史を明らかにしたいものである。



境内地図※



辯財天※

※「御参拜のしおり」より

参考・引用文献

1. 西川如見 1719『長崎夜話』
2. 田辺希文編 1772『封内風土記』巻 13 鈴木武夫『復刻版仙台叢書 封内風土記』第 2 巻宝文堂
3. 沖安海 1810『陸奥国少田郡黄金山神社考』
4. 宮田 登 1969「金華山信仰とミロク」『陸前北部の民俗』吉川弘文館
5. 小野寺正人 1977「金華山信仰の展開」『東北霊山と修験』山岳宗教研究叢書 7 名著出版
6. 月光義弘 1977「金華山の修験道」『東北霊山と修験』山岳宗教研究叢書 7 名著出版
7. 竹内理三編 1979『角川日本地名大辞典』4 宮城県
8. 吉田東伍 1980「陸前(宮城)牡鹿郡」増補『大日本地名辞書』第 7 巻 奥羽 富山書房
9. 牡鹿町 1998『牡鹿町誌』上巻
10. 牡鹿町 2002『牡鹿町誌』下巻
11. 牡鹿町 2005『牡鹿町誌』中巻
12. 尾上周平 2016「陸奥金華山の宗教空間—近世・近代における絵図面等の比較検討を通して—」國學院大学博物館研究報告第 32 輯
13. 渡邊泰伸ほか 2007 歴史散歩 4『宮城県の歴史散歩』山川出版社
14. 尾上周平 2017「陸奥金華山の近世石造物」國學院大学博物館研究報告第 33 輯
15. 尾上周平 2019「僧侶墓からみた金華山大金寺の近世」國學院大学博物館研究報告第 35 輯

【コラム】「講」とは？

あまり普段の生活では聞くことが少ないが、「講」という組織がある。そもそも「講」には仏教を講ずる、経典を講義するという意味があったが、現在は、信仰とは関係ない同志的結社を意味するようになり、地縁的な「組」と並んで伝統社会における結合の単位として機能するようになった。上段で触れたように当初、奈良時代には僧の講義を聞く集団であった。その後、平安時代になると様々な講が出現し、僧が一人で講ずるのではなく問答を取り入れたり声明・管弦の演奏を取り入れるなどして趣向が凝らされるようになり、さらに経典以外に仏を賛嘆する「観音講」、「地藏講」などが発生した。中世では一つの信仰を共有する結社としての性格が強くなり、永続的な信仰結社の機能が付加され、領主に対抗して村々を団結して対抗した講は浄土真宗における一向一揆の母体ともなった。江戸時代に入り、庚申講、念仏講のほか、十九夜、二十三夜などの月の出を待って月に願を掛ける月待の講が広まり、講の祈願を記念した石仏・石塔が建てられるようになっていった。庚申講は庚申の夜に三戸という虫が天帝に悪事を報告しに行くのを防ぐため、その晩は寝ないでいるという中国の俗信から始まった行事であったが、徐々に夜集まって飲み食いすることに主眼が移っていった。

また、月待ち講では安産講、子育て講など女性だけを対象にした女人講もあり、この他にも嫁講、中年講、老人講など各世代の講も増えていった。これらは遊山講とも呼ばれ、村落社会の中での楽しみの一つでもあった。

一方で、富士山や出羽三山などの遠くの山に登る講、伊勢神宮や善光寺といった遠くの社寺を参詣する講も生まれ、講の中でお金を出し合い代表者が参拝してお札をもらってくるものを代参講という。

金華山講もこの代参講の一つで、多くの参詣者を集めた。各地には金華山を参詣した際に建立した記念碑が今も路傍にひっそりとたたずんでいる。

(佐々木 竜郎)



〈参考・引用文献〉

坂本 要 1999『見る 知る 愉しむ 民俗学がわかる事典』日本実業出版社

金華山講について

文化財調査室 田村 優衣

♪～三年続けてお詣りすれば

金に不自由はさせまいしまい

サアサ景気は金華山から

金銀財宝福の神～♪

音頭にも歌われる金華山に建つ黄金山神社の祭神は、^{かなやまひこのかみ}金山毘古神、^{かなやまひめのかみ}金山毘賣神であり、金属総体を保護するとされる。武器、軍艦や農具、漁具、貨幣、金銀財宝の守り神、福の神であると信じられ、人々は主に現世の利益を期待して大勢が参詣した。さらに、金華山への参詣を目的とした人々が集まり、地域ごとに「金華山講」が結集されることもあった。しかし、その昔、参詣者たちは非常に険しい道を行かなければならなかったと伝わる。

金華山には、金華山大金寺という神仏習合の寺があったと言われている。度重なる火災や神仏分離の際に四散してしまった影響により資料が少なく近世以前の宗派は不明であるが、近世には真言宗であったとする記録が残っている。弁財天を本尊として安置していたが、明治2(1869)年の神仏分離の後で黄金山神社と改称した。金華山大金寺に関しては、島内の地名に「胎内潜」「蘇字峠」「浄土口」「天狗沢」などの修験道と関係する名称が見られることや、かつて女人禁制であったことのほか、島へ出入りするには草履の履き替えが必要である聖域だったことなどから、修験の寺であったとする説がある。この修験道と宗教的な講は関係が深く、伝道を目的とした修験者は霊山への登山を様々な地域へ勧めて歩き、地域の人々は参拝のための講を作っていたのであった。金華山でも金華山講が結集され、離れた土地からも講の代表者である代参人が参詣するようになるなど信仰は広まりを見せた。

金華山講が広まった背景には、地域にもともとあった「巳待講」がその一つとして考えられている。巳待講の一種とされており、己巳の日の前夜に集まって己巳の日に解散する。巳、つまり蛇は弁財天と関連が深いとされた事で、かつて弁財天を祀っていた金華山も受け入れられやすく、金華山講は巳待講を通して浸透したと考えられている。昭和の頃に結成された金華山講には、毎年2巳の日に精進していた例があり、2018年時点の山形県には「巳待講」と称し二年に一度宮城の金華山か栃木の古峰神社に参拝する例もあり、巳待講と金華山講の深い関連がうかがえる。このように金華山信仰は神仏分離以後も続いたが、島へ渡る目的の多くは、次第に観光へと変わっていった。しかし、現在でも信仰上の参詣者は見られる。

かつて金華山参詣に必要な不可欠なものは草履とされ、参詣者は草履を背負って出かけて行った。参拝路の起点は石巻であった。各々石巻まで来ると、そこから渡波へと至り、そこからは陸路か海路を利用できた。陸路は金華山街道ともいわれ、石巻から渡波を経て牡鹿半島を抜け、鮎川を通過して金華山へと至る。一方で海路は、渡波から蛤浜、荻浜など半島の浦浜づたいに船を漕いで鮎川へ到着し、金華山へと至る。海路については、1770年代の時点でも渡波～鮎川の船便が出ており、陸路より早かったと考えられている。加えて、陸路は非常に険しい道であったた

めに、海路を利用する参詣者が多かったとされている。

陸路と海路、どちらを選んでも山を越え、山鳥に建つ一ノ鳥居を経由する。かつては「金華山へ参詣する際は必ず一ノ鳥居をくぐってから島へ渡らなければご利益がない」とされており、半島に建つこの鳥居はまさに金華山という神域への入口として重要視されていたと考えられる。また、一ノ鳥居は島に渡れない女性のために建てられたのだとも語られる。それは女人禁制の時代、女性はこの鳥居のところで遙拝したことや、「泳いで島へ上陸しようと試みた亀女という女性が神罰により石になり、今も金華山に残っている」亀石の伝説などを鑑みると、不自然ではないように思われる。

一ノ鳥居をくぐったあとは、半島と金華山の間にある「山鳥渡し」と呼ばれる海峡を船で渡らなければならないが、この「山鳥渡し」は非常に難所であったと伝えられている。距離は短くとも潮流が激しく、荒れると「御殿隠し」と呼ばれる金華山を隠すほどの大波が立ったという。何とか無事に渡りきると背負ってきた草履に履き替えてから上陸しなければならないが、参拝が終わって再び船に乗る時も草履を脱がなければならなかった。それらは俗界の穢れを持ち込まないためであり、島の神が島内のあらゆるものを外に持ち出すことを忌み嫌ったためであるといわれた。「あるとき、島の岩石を持ち帰ろうとした者がいたが、船が動かなくなり沈没した」という言い伝えも残る。

数々の困難を乗り越えて、やっと参詣人たちは半島へと戻ってくる。帰途に見えてくる一ノ鳥居は、きっと彼らを安堵させたことだろう。参詣においては禁忌があり、その道も陸は険しく海は天候次第で非常に難儀するものだった。しかし、その尋常でない困難さのゆえに、参詣の人々は神徳のある事をより強く信じたのだった。代参人が帰ってくると、神社から受けてきたお札を講中に配り、受け取った講の人々はこれを神棚に貼ったという。

金華山参りを重ねていくと、「金華山」と刻字された石碑が講中の手で、部落の入口などに建立されていった。「金華山」の碑は現在も各地に残り、金華山講の広がりを伝えるものとなっている。

参考・引用文献

1. 1931「金華山小誌」黄金山神社社務所
2. 七十七銀行 1963「七十七 1963/5 70号」七十七銀行
2. 月光善弘 1976「山岳宗教史研究叢書 東北霊山と修験道」名著出版
3. 東北民俗の会 1977「東北民俗 11号」東北民俗の会
4. ひたかみ出版社 1977～1978「月刊ひたかみ 39～47号」石巻二プロモーション
5. 1984「につぼん島の旅① 太平洋の島々」中央公論社
6. 1989「霊島金華山」黄金山神社社務所
7. 櫻井徳太郎 1989「歴史民俗学の構想 櫻井徳太郎著作集第八巻」吉川弘文館
8. 奥山淳志 2012「とうほく旅街道 歴史の薫りに触れる」河北新報出版センター



一ノ鳥居:金華山という神域への入り口として重要視されていた。

「防災」と文化財

文化財調査室 佐々木 竜郎

皆さんは『防災遺産』という言葉をご存じでしょうか？分解して考えると「防災」は字のごとく災いを防ぐことで、またその予防のための対策を行うことの総称です。防災遺産とはあまり聞きなれない用語ですが、先人たちが経験した災害を防災に生かした歴史文化の総合したものを意味します。

2018年に和歌山県広川町で「百世の安堵」～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～が日本遺産に登録されました。安政元（1854）年の安政南海地震で沿岸部に津波が押し寄せた際、時間が夜であったため実業家の浜口梧陵が稲束に火を付けて避難ルートを示し人々を高台に避難させたとする「稲むらの火」の逸話、犠牲者の慰霊と防災意識の継承を目的に50年後の明治36（1903）年に始まった「津浪祭」、また梧陵が津波から町を守るために築いた「広村堤防」（国史跡）や、人々が避難した神社「広八幡神社」（国重文）といった同町の防災に関わる26の史跡や祭りなどで構成されています。現在の海岸には、松が屏風のように立ち並び、見上げる程の土盛りの堤防が海との緩衝地を形成し、沖の突堤と海沿いの石堤が多重防御システムを構築しています。また、堤防に添う町並みは高台に延びる通りや小路に面して軒を連ね、避難を意識して町が築かれています。江戸時代に津波に襲われた人々は見事に復興を果たし、そして世代から世代へと災害の記憶を伝え、今なお暮らしの中に防災文化が息づいています。

2020年は、東日本大震災の発生から10年目の節目を迎えました。沿岸部では防潮堤の完成や復興道路の開通、住宅の再建などハード面が着々と進められ、同時に各地で新たな街づくりも進んでいます。その一方で防潮堤の築造やかさ上げ工事等で、震災前の様子とは大きく様変わりしてしまい、当時を思い出すことが困難な地域もあります。しかし、東日本大震災のような未曾有の災害を我々は決して忘れてはならず、この経験を教訓として災害の防止に役立てると同時に経験を語り伝えていく必要があることは、生きている我々の義務とも言えます。壊滅的な被害を受けた沿岸地域の復旧・復興を進めていくにあたり高台移転や職住分離、多重防御による大津波対策等が進められています。『3.11 伝承・減災プロジェクト』（宮城県土木部）として、被災事実を後世に伝承し迅速な避難行動に繋がる取り組みがあります。（<https://www.pref.miyagi.jp/site/0311densyogensaip/>）弊社では、この取り組みの一部でお手伝いさせていただき、私たちが沿岸部の復興状況を目の当たりにしてきました。防潮堤ができて海の見えない住宅地となった今、津波の痕跡は既に分からなくなった地区もあり、伝えていくことの大切さを改めて知ることとなりました。

いつの日かこれらのものが文化財となる日が来るのでしょうか。



津波浸水表示板

実物大のハザードマップとして地域住民のみならず地元の地理に不案内な観光客への津波防災意識の啓発を目的として設置しています。



施設計画概要案内板（伝承板）

河川、海岸堤防の高さの考え方や、防災道路の位置付け等を併せて表示し、多重型の津波防災対策についての周知を目的としています。

それは、大地を読むことから始まる。



Construction Consultant

株式会社 三協技術

E-mail : sankyo@sankyocc.jp

一 業務内容

- ・建設コンサルタント業
- ・測量業
- ・地質調査業
- ・補償コンサルタント業
- ・文化財調査
- ・不動産業
- ・数値解析
- ・環境調査
- ・下水道調査
- ・一級建築士事務所
- ・特定建設業
- ・宅地建物取引業
- ・労働者派遣事業

本社 / 〒980-0803

宮城県仙台市青葉区国分町3丁目8番14号
TEL : 022-224-5503 FAX : 022-224-5509

調査部 / 〒980-0011

宮城県仙台市青葉区上杉1丁目7番7号2階
TEL : 022-796-5816 FAX : 022-796-5826

文化財調査室 / 〒982-0003

宮城県仙台市太白区郡山5丁目19番15号
TEL : 022-748-0225 FAX : 022-748-0226

大崎支店 TEL : 0229-91-8465 FAX : 0229-91-8466
東京支店 TEL : 03-6276-1624 FAX : 03-6276-1625
盛岡支店 TEL : 019-681-7483 FAX : 019-681-7484
福島支店 TEL : 024-973-8681 FAX : 024-973-8682

山形支店 TEL : 023-665-5735 FAX : 023-665-5736
北関東支店 TEL : 028-611-3432 FAX : 028-611-3454
青森営業所 TEL : 017-718-0911 FAX : 017-718-0912
秋田営業所 TEL : 018-883-3910 FAX : 018-883-3911

石巻営業所 TEL : 0225-21-5563 FAX : 0225-21-5565
気仙沼営業所 TEL : 0226-25-9098 FAX : 0226-25-9108
福島営業所 TEL : 024-572-7370 FAX : 024-572-7371
栗原営業所 TEL : 0228-24-7921 FAX : 0228-24-7922